

眞の佛弟子

階級及び社會連帶思想より見て

三枝樹 正道

一 登山道

登山道。それは坦々たる大通りもあらう。又羊腸たる攀路もあらう。然し何れにしても共に、古くから多くの人が親しく登り親しく降つた通路であつた。いつの世に、いつこの人が發見したのか、その道には、不思議を悟り、神秘を残す所謂遺跡もある。身體の疲れを癒し、旅の無情を慰める名物茶店も出來てゐる。又瀧あり流れあり、大樹あり草原あり花畑あり森林あつて或は目を樂ましめ耳を悅ばし、登山者をして連日の勞苦もこれを償ふて充分價值あらしめてゐる。登山の愉快さは元より山頂を極めることにあらう。けれども、亦その途中にあつて先人の遺跡に古き歴史を尋ね幽邃なる絶景に精神を遊ばし茶店の老嫗に名物の由緒を聽くのも楽しいものである。

今茲に佛敎史上の、泰山にも比すべき吾が高祖善導大師の一千二百五十年大遠忌を迎ふるに際して、導師に對する絶對の信順と滿腔の敬慕を抱ける淨土教徒は、或は生活に或は研究に導師の全分を體解せんとして種々の方面に於て、既に多くの業績が出され今益々進められ尙ほ將來に大いに發展されんとしてゐる。此時に當つて自分も一淨土教徒として導師の眞髓に觸れ全善導の宗敎的體験を踏破せんことを衷心希念するものであるが、鈍根の凡夫到底其機に非ず、止むなく、導師研究途上の名勝、遺跡も云ふべき二三の問題に就て粗雑なる所感を陳べやうと思ふ。もよみよりこれ研究し

云ふ程のものでなく、茶店の老媪の古嚙の如きもの。唯だ懼る導師の高徳を傷けざらんことを。

二 凡 入 報 土

導師の教への中で最も強い光を放つてゐるもの一つは恐く凡入報土の思想であらう。凡入報土に關する詳細なる研究は別に人のあることであり、従つて今茲で自分の立入つて深く論じ様とする問題ではない。唯だそれが導師に依つて始めて明瞭に主張されるに至つたこと、それ以前の諸大徳諸高僧がその眞意を把持せられなかつたことに就て暫く社會學的見地から視察してみたいと思ふ。

佛意が既に茲にあつて而も一千有餘年の長い間、それが顯れずに種々の解釋が施され、釋尊出世の本懐が發見されずに、永く隠れてゐたことに就いては、學者天々の見方もあらうと思ふが、自分は今その一つとして階級思想の構成及び發展固定云ふ方面よりこれを眺めて見たいと思ふ。

抑も釋尊傳道の本旨は、偷安の貴族も苦惱の賤民も共に、何等の差別なく、一切衆生を悉く平等の慈悲の中に救濟せんことを以てした。それでこそ、當時あのカストの制度厳しかりし印度に於て、勇敢にも回姓の別を打破し、雄々しくも一切衆生悉く佛性の大施を押し立て、大悲の法燈をか、けられたのであつた。従つて佛陀の金口より迸れる説法は、勿論時に際し機に應じて千差萬別、所謂八萬四千の法門ともなりしことなるが、然し佛の眼には惱める衆生としての一團があつたのみであり、轉迷開悟、生死解脱の門の前には佛道精進の和合衆があつたのみである。而して、そこには上下の差もなく貴賤の別もなく唯だ一樣に佛弟子であり、凡てが佛の一子であつた筈である。かの十大弟子の中にさへ舍利弗等の如き婆羅門出身の偉傑もあれば、持律第一と稱せられた優波離の如き首陀羅出身の比丘もあつた。かくの如く從來の婆羅門教の如き階級的にして極めて偏狹なる教より印度の全人を解放し、更に進みては世界の人類の救濟

を説きしものが佛教であつた。

然るに、かゝる佛陀の大悲も、時を經、處を隔つるに従つて、或は曲解され或は誤傳されて、遂には煩惱妄念の凡夫常設流轉の衆生は、悉しくも報土往生を不可能さへ説かるゝに至つたのである。恰も此時、吾が善導大師は、深く佛意を經藏に探り、高く聖旨を淨業に求め、遂に、凡入報土の隠れたる佛陀の本懷を顯し、從來の謬れる諸師の説を匡し以て古今を楷定し初めて彌陀の本誓を開陳されたのである。吾が宗祖法然上人が、實に導師こそ、彌陀願生の垂迹なりとして偏依善導の正宗を日域にお開きになつたのも、此凡入報土の教への教である。親鸞上人は又善導獨明佛正意云つて導師を衷心隨喜讚歎しておられる。眞に宜なり云ふべきである。

さて、導師の稍以前に於ても淨影の如きは、報土往生人を大小乘の聖人として、通常の凡夫と區別せしを始め、或は凡夫往生を許すも、それは凡聖同居土となし、彌陀の淨土を極めて下級のものと見る等、何れにしても諸師の説大同小異なるが無始以來無明に閉ざされし凡夫の到底報土往生は不可能なる一事に至つては皆同一である。これのみを以て直ちに階級思想の現れである云ふことは出来ないが、導師が九品皆凡を唱へて彌陀の報身報土を全人類に解放して、極惡甚重の凡夫をも往生の可能を力説されし、その宗教的眞摯な態度に比して、そこに幾分の貴族的な階級的の閃きを眺められはしないかと思ふ。

抑も釋尊出世の本懷が既に一切有情の得脱であり、佛陀説法の對象が平等一切の衆生であつたにも拘らず、その教へが、時空を隔て、幾多の先徳古聖によつて傳へらるゝ間に、彌陀の淨土は封鎖的となり、佛の大悲は差別的となつて、遂に末世澆季の凡夫は全く報土往生不可能となつてしまつたのである。従つて成就衆生、淨佛國土の大使命も遠き未來の夢と化するに至つた。事茲に至るの原因には、種々の立場より種々の見解を下すことは可能であると思ふが、自分は今これを社會思想の變遷の中に立つて階級意識の一點より眺めて見やうと思ふ。勿論かゝる立論が許さるゝや否やか先

づ問題であるが、今は只一つの試みとして筆をすゝめて見ることにする。

凡そ現在階級云はるゝ言葉の中には、色々の意味内容が盛られてゐる。が今はその詳論は避くることにして、タードに依れば社會門に於ける地位を同じふせるものゝ一團である。而してその中にはカストの如く嚴密なる、且つ封鎖のものもあれば、又シユタントの如く職業の相等しきものを意味する場合もあるが、それらは寧ろ附屬的な意味にして要は社會的地位の上下に基く團體を云ふ。而してかゝる階級には自ら階級的精神或は階級意識も云ふべきものを生ず。尤も近代唯物主義者マルクス派社會主義者の人々の云ふ階級は全く一つの經濟的概念である。従つてその階級意識云へばそれは所謂プロレタリアートが自己の地位を自覺してブルジョアジーに對立して團結しその共通の利害に對する關心の自覺云ふ意味に解釋さるゝが、これを廣く見れば即ち地位を同じふせる一團の共通な關心の自覺を見るこゝが出来ゝ。従つて他の凡ての階級にもこれを及ぼして考へるこゝが出来ゝ筈である。かく見る時に階級的精神は上級の地位にある人々には、その共通に有する社會的名譽或は特權を長く獨占せんとする關心を以て顯れるものである。今これを階級的精神と見る。古來かくの如き意味の階級的精神の顯れは實に多くその事實を見るこゝが出来ゝ。即ち何れの國に於ても昔より所謂上流階級の人々は、己れの地位を長く保持し、益々強固ならしめんとして種々の方法を考へたものである。

まづ第一は地位の世襲である。我國古代に於ける字遲、加婆禰の制度の如きはその一例と見るこゝが出来ゝ。勿論この制度はそれ以外に職業の種別及び血統の相違を現すものではあるが、此字遲、加婆禰を有するものは皆當時の支配階級であり特權階級であつたことは争はれぬ。而も何故にかゝる制度を催けしか云ふにこれ他の部民賤民を區別して自己の地位の優秀なることを示すと共に永くその特權を保持せんとする意志に出でたるものと見るこゝが出来ゝ。又古代支那に於ける禮法或は一定の儀式を定めてそれを獨占するこゝによつて地位の安全を保持せんせし如き、即ち周代

の祭祀に於ける其地位によつて祭るべき神を異にして従つてその儀式をも變へ、或は印度に於ける婆羅門の神事を司るが如き、これ皆特殊の意味あるにせよ。必ずその理由の一つはこれを世襲して地位の永續特權の保持の爲である。

第二として當然此世襲から起る問題であるが、即ち階級的内婚の制である。吾國に於ても戸令に示す所謂良民と賤民との婚姻の禁、鎌倉時代の御家人と非御家人との婚姻の制限の如き、或は支那に於ても官吏と樂人妓等との禁婚の如き、更に印度のカスト間の通婚の禁ぜられしが如きはあまりに明瞭な事實である。此外ローマ、アラビヤ、アフリカに於てもその例は見出すことが出来る。現代に於ても「つりあはぬ」の一語はこれらの事實の存在せしことを物語る名残りではなからうか。要するにかくの如く上流の階級の人々は自らその尊貴を持つ爲に多く内婚を通則せしものである而してその反面には下層階級の人々を賤視して益々階級の固定化を齎すに至つたものである。而も多くの人類は稍もするに上流階級に屬することを誇りとし又屬せんことを羨望するものである。幾多の流行現象が上流社會より起つて下層の者がこれを模倣するによつて起るを見ても此一事は充分想像することが出来ると思ふ。

偲て話が大量餘談に入つて行つたが、茲で本論に戻ることにして、今佛教の傳來を見るに、釋尊を遠ざかるに従ひ、全人類の救濟はいつしか忘れられ、傳道者は王侯貴族の歸依と保護によつて自ら一般民衆の尊敬を受くるに至つて、不知不識の間に社會の上流に位するに至り、その思想も亦貴族的となり、經文の眞意をすらかゝる見地に立つて眺めんに至るに至りしものならんかと思ふ。尤も階級意識が明瞭に貴族及一般民衆に覺醒して來たのは極めて近世のことであるから古くは現在の如くに意識されしものは考へられないが、従つてこれを唯一の理由とは考へるものでは決してないが、少くも佛意が隠れ大想が現れざりし原因の一つとして、前述の如き上流階級の人々にあり勝ちな、封鎖的な貴族的思想が自ら佛教傳道者の間にも潜在せしものには非るかと思ふのである。その爲に本來は修養の道程であるべき九品の解釋をさへ不覺にも階級的封鎖的に眺められしものであらう。導師の宗教的體驗はよくその佛意に觸れ、鋭き慧眼

は經文の紙背に徹して、茲に再び大悲の顯現を拜するに至りしこゝは實に隨喜感謝に堪えない。

三 顯共諸衆生

既に執はれたる階級を出で、一切衆生の救濟と云ふ宗教的生活に精進されし導師は、願くば諸の衆生と共に願求されるのは當然の歸結であらう。當時一世の尊敬と歸依とを一身に集めて經論の翻譯に専心せし高僧玄奘三藏のいかにも貴族的な風手に對して終南の山僧として一般民衆の教化救濟に専念されし導師の御姿は實に雲泥の差であつたであらう然し三藏には學者としての尊敬は拂ひうるが、佛弟子としての敬慕の念に於ては導師が遙かに勝れてをられしこゝは勿論である。

釋尊は決して獨り悟りを悅樂されたのではない。成道の刹那より直ちに、先きの同行五比丘の教化をされ、更に一切衆生の救濟に乞食托鉢をされては説法を遊された。悟りの内證は即ち一切衆生に對する大悲の惱みとして顯れ、凡てのものが共に佛果に至らんことを念願して止まない傳道となつたのである。導師も亦かの往生禮讚に於けるが如く、無常偈に於て自内證の一端を痛烈に示しつ、一切衆生と共に願往生の心を勸進して居られる。禮拜の都度に願共衆生一切衆生を平等に得脱せしめんことを念願せらるるこそ眞に覺者としての尊き姿であらう。これ全く小さき階級の桎梏を蟬脱せし者のみ味ひうる世界である。

十九世紀の佛國の空想的社會主義者と云はる、サン・シモン（サン・シモン）の唱へし社會連帶思想は正に此願共衆生の心である。少しく定義的にこれを云へば、同一の方向に向ふ共通の欲望であつて、即ち人類は時間的に見れば過去の人の精神的物質的遺産によつて現代人は生活し、又空間的に見れば現代人は、一は共通の欲望を持つが故に、他は相互に相補ふが故に互に連帶し結合せるものである。従つて人類は時間的空間的に眺めて、即ち時代的に社會的に眺めて決して孤立しうる

のではない。故に萬人は共に相互扶助、共同して生活すべし云ふが社會連帶の思想である。佛教に於ける緣起の思想である。社會學者の云ふ連帶思想は主として經濟生活に關しての論なるが、これは更に佛教の緣起論に説くが如く人類の全生活に徹底さすべきものにして、此意味に於て導師の願共諸衆生の語は實に後世の學者が理想として考へし境地を自ら實行し、且つその淨域に遊化さ、れしを物語るものである。

唯物主義社會主義者は激しき階級闘争の後に始めて無階級の理想社會を建設せんとし、空想主義者は又直ちに連帶社會の出現を夢みて、現在の私有財産遺産制度の否定を考へる。何れもその實行に於て、手段に於て誤つてゐる。既に三千年の以前に釋尊が更に下つては千數百年以前には善導大師が、彼等の云ふ理想社會よりも更に完全な社會の建設に其尊き一生を捧げられ、而も、その方法手段に於て現代に實行して少しも妨げず、否、現代は正に佛陀の御教示、導師の御示範によつて始めて救濟さるべきである。導師の所謂、一切の衆生と歩みを共にせんさせらるゝ願こそ、曾て釋尊の歩まれし道にして佛弟子の當然進むべき過程である。導師こそ眞に社會連帶思想の實行者にして、緣起を實際に御示範されし云ふべきである。

四 下 山

尙ほ深信及二河白道の社會心理學上より眺めし感想等は、これを組織立て論ずれば多少貢獻する所はあるものと思ふが、かゝる研究ならざる俗論により尊き紙面を汚し、且つ導師の御高德を更に傷けることは實に忍びざる所であるから茲に擱筆することにする。

茶店の老嫗の物語る名物の由緒には、事實あり假空あり、到底一概に信用はおけない。今自らが右に物せし一文も、善導大師遠忌記念號發刊に就き、何かを書くべく自他より慇懃せられて、短日月の間に筆を下せしもの、諸賢の御叱正を乞ひ後日の研究の一助と致したいと思ふ。